
人が人を助ける「価値」とは

福祉系NPO法人役員、資格スクール講師 専門職2005年卒

須田 研一

1 はじめに

2011年3月11日、東北・北関東を中心に起こった大規模地震は巨大津波の影響もあって未曾有の大災害となった。発生間もないころ、一部の韓国紙には「日本沈没」の文字が躍った。が、あまりのセンセーショナルな見出しに韓国国内からも批判が相次いだ。言葉を換えれば、それほどすさまじい惨状であったと伝えたかったのであろう。そして、現在も死者・行方不明者数の報告が日々なされている。死亡者数は1万5千人を超え、行方不明者も3千人を超えている（2012年7月15日現在）。原発事故の収束作業はこれからも年単位あるいは数十年単位で続いていく。

また、住み慣れた地域から離れて、避難生活をしている人が32万人以上もいる。特に原発事故の後遺症は大きく、全ての被災者が自宅に戻れるという保障はどこにもない。故郷を奪われ、家族が離散し、仕事も失うなど、多くの人々がほんのわずかな時間に起きた出来事で人生を狂わされてしまったのだ。

このような状況の中で、多くのボランティアが被災地へかけつけた。また、現地での直接支援以外にも、人々は募金への参加や必要な物資の寄付など各々の方法で支援を実行した。そして企業もさまざまな支援を行ってきている。たとえば私が所属するNPO法人（埼玉県所沢市）でも、CIL所沢と一緒に募金活動を行った他に、株式会社ミライロ主催の「東日本大震災ハートチェアプロジェクト」に協力団体として参加し、仙台市・気仙沼市・陸前高田市・南相馬市などの被災地へ車椅子を200台寄贈した。また、お中元企画として、風

評被害にあった福島県の「あかつきの桃」を斡旋販売するなどの活動をしてきた。

そして、震災から1年以上経た現在も多くの人々がさまざまな支援をし続けている。それでは、なぜ、人はこのように人を助けるのであろうか。それが本稿のテーマである。

2 問題山積の社会

昨今は、被災者支援の例に見るまでもなく、人と人との助け合い、「共助」の精神—人と人とのつながり—がさまざまなところで求められている、人が人を必要とする社会だといえる。そんな現代社会をまずは俯瞰する。

（1）蔓延する「生きづらさ」

生きづらさを抱えている人は、大震災にあわれた方々の他にも大勢いる。2000年以降「生きづらさ」などの言葉をタイトルに入れた書籍が多く出版されているのがその証ではないか。そして、その「生きづらさ」は世代に関係なく蔓延しているのである。

内閣府が行っている「国民生活に関する世論調査」によると、「悩みや不安を感じている」という人々は平成22年調査で68.4%であった。過去最高だった平成20年の70.8%よりは減少しているものの、依然として高い数値であることにはかわりはない。その内訳をみると、「老後の生活設計」が52.4%。以下、「自分の健康」49.2%、「家族の健康」42.6%、「今後の収入や資産の見通し」39.7%、「現在の収入や資産について」33.0%等となっている。

確かに「老後の生活設計」にかかせない年金収

入は、世代間の助け合いで現在ではかろうじて成り立っているが、現役世代（支え手）の減少や少子化の影響もあって破綻しつつあるのは誰の目にも明らかだ。

また、国民の健康をつかさどる医療は、地方や一部の診療科を中心とした医師不足や都市部でも度々起こる救急患者の受け入れ拒否（たらい回し）などに見られるように危機的状態にある。

さらに、「老後の生活設計」「今後の収入や資産の見通し」「現在の収入や資産について」などの経済的不安をもつ人が多くいる。2011年の非正規雇用率は、35.2%と最高値を更新し続け、非正規雇用者は3人に1人を超える人数となっている。また、年収200万円以下の労働者も年々増加し、1千万人を超えている。加えて、生活保護費は3兆円を優に超え、貧困問題が顕在化してきた。

藤田孝典氏は、本校の講演（2009年）において現代の貧困問題は経済的貧困とともに人間関係の貧困にあると語った。それは彼を訪ねてきた多くの相談者が、他に相談できる相手も、頼れる家族や親族もいなかったからだ。そこには人と人とのつながりなき社会（昨今は「無縁社会」なることばも生まれた）を物語っている。

それと関連して、見過ごすことのできない問題が自殺者の人数である。自殺者数は1998年から毎年3万人を超えている。2006年には自殺対策基本法が施行されるなど行政の動きもあるが、歯止め役を果たしているとは言い難い。

こうして人と社会とをみると、多くの人々が「悩みや不安」、つまり何らかの「生きづらさ」をかかえながら生きていくなると言えそうである。

萱野稔人は「生きづらさ」について、「人間関係のなかで精神的な『生きづらさ』をかかえている人もいれば、貧困からなかなか抜け出せなくて経済的に『生きづらい』という人もいる。社会のなかで疎外感や居場所のなさを感じて『生きづら

さ』という人も」ⁱいると述べているように、「生きづらさ」には、「精神的・経済的・社会的」な「生きづらさ」があるのである。そして、その「生きづらさ」には、精神的・経済的・社会的な問題が複雑に絡み合っているのである。

（2）命や人権が軽視される社会

ひとりひとりの命はかけがいのないものである。そんなことは言われなくてもわかっている。しかし、先に見てきた通り、自殺者数は毎年3万人を超えているのである。

3.11大震災によって、多くの人命が失われた。また、震災後に程度の差こそあれ不自由な生活を余儀なくされた被災者の方々も、憲法25条のいうところの「すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」状態にあると果たしていえるのだろうかⁱⁱ。

2012年5月5日、定期検査のためにすべての原発が停止した。しかし、原発事故による未曾有の大惨事に直面しても、政府は原発への依存をやめていない。しかも、「安全確認の態勢が不十分」にもかかわらずだ。政府は原発を再稼働しないと「雇用に影響が出て、企業は倒産する」「国民生活や経済に悪影響が出る」といって、早期の再稼働に躍起であった。そして、多くの国民の反対を押し切って、政府は原発再稼働に踏み切ったⁱⁱⁱ。

こうした一連の原発再稼働の動きからしても、人の命よりも経済活動を優先させるといった政府の姿勢がはっきりと読み取れてしまった。

人命を尊重しないという点では、本来は絶対にあってはならないことだが福祉専門職による人権軽視の実態も見逃せない。たとえば、2012年2月には、介護付有料老人ホームで働く介護福祉士3人が暴行容疑で逮捕された。家族が設置したビデオカメラに写った暴行（虐待）の様子は実に衝撃的であった。

i 雨宮処凛・萱野稔人『「生きづらさ」について』光文社、2008年；p.8.

ii たとえば、「人工透析を受けている患者は、専用のレトルト食品が常備されていないために避難所での食事に困っていた。障害者用トイレが設置されず、車いすを使う人が避難所に行くのを諦めた、という例もあった」（朝日新聞2012年5月4日）

iii 2012年7月1日、大飯原発3、4号機が多くの国民が反対する中再稼働された。

また3月には、認知症高齢者グループホームで、女性介護職員2人が入所者5人に対して、平手打ちや土下座をさせていたことが報道された。こうした虐待については、障害者施設や児童施設でも起こっている。ノーマライゼーションやインクルージョン、人権の尊重という福祉の理念を率先して実践していかなければならない人たちでさえ、人権感覚の麻痺に陥ることがあるのである。福祉士養成カリキュラムでは実践力の重視をうたっているが、それも命や人権を大切にせる教育があつてこそである。大前提をおろそかにすることは断じて許されないはずである。

3 絶対的な「価値」

以上にみてきたように、近年は人と人とのつながりが希薄化した社会であり、また、命や人権を軽視した実態もみられている。しかし、一方では災害ボランティアに見られるように、多くの人々が東日本大震災の被災者へ支援を行っている。人が人を助ける行為は、なにも被災者（地）支援にかかわらず、例えば、電車の車内でのお年寄りや妊婦への席の譲り合い等、日常的にもおこなわれていることである。そして、そこには前提として求められる「価値」があるのである。

（1）前提として求められる「価値」

岩間信之は「価値」について、「人の存在自体に価値をおくこと、本人の主体性を最大限に尊重すること。社会における相互援助を重視すること」と述べている^{iv}。「人の存在自体に価値をおくこと、本人の主体性を最大限に尊重すること」とは、言い換えれば、「人間尊重」であり、「人権の尊重」「生命の尊重」であるといえる。すなわち、高齢であっても、障害があろうとなかろうと、あるいは、憲法14条のいう「人種、信条、性別、社会的身分又は門地」にかかわらず、すべての人間は価値ある存在であるということである。

また、「社会における相互援助を重視すること」は、ブトゥリムのいう「人間は他者との相互関係をもちながら社会生活を送っている社会関係的な存在である」といったところだろう。そうして、国際ソーシャルワーカー連盟では、ソーシャルワークの定義（2000年）において、「ソーシャルワークは、人道主義と民主主義の理想から生まれ育ってきたのであつて、その職業上の価値は、すべての人間が平等であること、価値ある存在であること、そして、尊厳を有していることを認めて、これを尊重することに基盤を置いている。ソーシャルワーク実践は、1世紀余り前のその起源以来、人間のニーズを充足し、人間の潜在能力を開発することに焦点を置いてきた。人権と社会正義は、ソーシャルワークの活動に対し、これを動機づけ、正当化する根拠を与える」として、人権と社会正義に価値をおいている。が、これらはなにもソーシャルワーカーの専売特許ではなく、大多数の人々が共有しえる「価値」（規範）と言えるであろう。

（2）人が人を助ける「価値」

それでは、なぜ、人は人を助けるのであろうか。以下は生徒から聞いた意見だ。

「人道的見地からして当然」「困っている人、弱者を助けるのは人として当然」「人としてのやさしさから」「社会の一員としての使命」「人が人を助ける行動は、誰しにも備わっている」「困っている人を排除する社会は弱い社会である」「助けを必要とする人が存在するから」「人間社会は助け合いで成り立っている」などである。すなわち、人が人を助けるのは当たり前のことなのである。

人は、小さい頃からさまざまな人たちとかかわりをもって生きていく。つまり、人は長い時間、多くの人々とかかわって成長するのである。そして、そのかかわりの中でうまれてくるのが社会（家族・学校・地域）である。そうした関係性の中で

iv 岩間信之「対人援助の根源になにを求めるか」『社会福祉援助と連携—21世紀の架け橋—社会福祉のめざすもの—』中央法規、2000年

自然発生的に援助が生まれてくる。

また、こうした助け合いの精神は国境をも超える。東日本大震災では、多くの国や地域の人々が被災地に入って支援を行い、日本の特別救助隊等も幾度となく海外へ災害派遣されている。

さらに、家族や病院・地域社会での支援が困難になり、ソーシャルワーカー等の福祉専門職がその役割を果たすといった場合、そこに専門職が社会的に存在している「価値」があるのである。福祉専門職は、困っている人々の生存を守るという社会的意義があるからである。

4 おわりに

前出のブトゥリムは、「人間尊重」の「価値」のほかに、「人間は他者に依存する存在である」という「人間の社会性」についても「価値」のひとつにあげている。例えば、自宅にひきこもりがちで、食事はコンビニ弁当だったとしても、そこには多くの人々がかかわっているのである。お弁当を作る人、店舗に配送する人、コンビニエンスストアで販売する人など、さまざまな人がかかわっており、私たちは多くの人々とのくつな

りゝのなかで生活を送っているのである。つまり、人はひとりでは生きていけないのであり、必ず誰かしらの助け（支え）を必要としているのである。大震災を契機に自分の考え方や行いを見直した人も多いが、人が人を助ける価値についても再考させられた。

人が人を助ける、そのことに理由はないのである。

なぜなら、生命の尊重、人権の尊重、法の下での平等、生存権など憲法を具現化していくといった法的根拠から見た場合と、もうひとつは、人を排除する社会よりも、包摂の社会の方が健全であると思うからである。

人が人を助けるという当たり前のことを通して、現代において、失われがちな人と人とのつながり（人間関係）を再構築することこそが、希望社会の第一歩となるのではなかろうか。

参考文献

ゾフィア・T・ブトゥリム『ソーシャルワークとは何か―その本質と機能』川島書店、1986年